

ケータイ電磁波 発がん性確認か

米で動物実験

IARCによる発がん性評価

例

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1 発がん性がある | アスベスト(石綿)、
たばこ、
電離放射線 |
| 2A おそらく発がん性がある | アクリルアミド、
DDT |
| 2B 発がん性の可能性がある | ガソリンエンジンの排ガス、
携帯電話の電磁波 |
| 3 発がん性について分類できない | |
| 4 おそらく発がん性がない | |

携帯電話の通信に使われる電磁波をラットに長期間浴びせると、雄ではまれなタイプのがんの発生が増えた。米国立環境健康科学研究所(NIEHS)のチームが5月、そんな研究結果を公表した。

雌雄別に90匹を1グループとし、電磁波を10分浴びせては10分休むパターンを1日約18時間繰り返して胎児期から2年間続けた。電磁波の出力を変えたグループや浴びせないグループも飼育し、がんの発生状況を比べた。

電磁波を浴びた雄では2〜3%に脳腫瘍の一種である神経膠腫ができ、1〜7%に心臓で「シユワン細胞腫」が発生した。一方、電磁波を浴びた雌と、浴びていない

雄と雌では、この2種類のがんの発生はなかった。

携帯電話の電磁波の発がん性について、世界保健機関(WHO)の専門組織、国際がん研究機関(IARC)は、可能性があることを意味する「2B」と評価している。人での調査結果を基に神経膠腫などとの関連を指摘しつつも、動物実験による実証が十分でないとの理由だ。チームは「まだ関連を断定できる段階ではない」と説明。電磁波の健康影響に詳しい本堂毅・東北大准教授は「電磁波の発がん性を調べた動物実験の中で最も厳密かつ大規模なものといえる。IARCの発がん性評価に変更を迫ることになるのでは」とみる。